

# 東京裁判と アメリカ人弁護士

# 1、目的

▶ 東京裁判をアメリカ人弁護士から読み取る

アメリカ人弁護士は敵国日本の戦犯を弁護する。裁判の中で最も異質な存在。最も面白い存在とも言える

## 2、アメリカ人弁護士

### 2.1 アメリカ人弁護士について

- 日本人の補佐

東京裁判は米英の方式での裁判となるため。また、日本弁護団は裁判が始まった当初は「国家弁護」と「個人弁護」の二派に分かれていた。

- 身分、経歴

軍で法務の仕事をしていた人や戦時中の捕虜の尋問担当だった人など軍に関係のあった人が二十数人中五人もいた。

- 選ばれた経緯

日本弁護団→GHQ→アメリカ政府→アメリカ人弁護士の流れ その結果、軍に関係のある人が多くいたと思われる

## 2.2 日本との関係

- ▶ 日本語を話せる人もいた
  - ▶ その後日本に永住した人もいた
- 日本への差別的感情は少ないと思われる

## 2.3 アメリカ人弁護士の仕事について

最初はきちんと仕事をするのか期待と不安の両方があった

なぜなら

- 敵国アメリカの人、特に軍人などもいたから
  - GHQの息のかかった人がいるかもしれない
- ニュルンベルク裁判ではアメリカ人弁護士がつかなかった
  - その結果東京裁判以上に不公平な裁判となった

裁判の公正さを装うための連合国の芝居の可能性もある

## 2.4 実際、彼らは仕事を全うしたのか

### 裁判中のアメリカ人弁護士の発言

#### ベン・ブルース・ブレイクニー弁護士

「キッド提督の死が真珠湾攻撃による殺人罪になるならば、我々は、広島に原爆を投下した者の名を挙げる事ができる。投下を計画した参謀長の名前も承知している。その国の元首の名前も承知している。彼らは、殺人罪を意識していたか？してはいまい。我々もそう思う。それは彼らの戦闘行為が正義で、敵の行為が不正義だからではなく、戦争自体が犯罪ではないからである。何の罪科でいかなる証拠で戦争による殺人が違法なのか。原爆を投下した者がいる。この投下を計画し、その実行を命じ、これを黙認したものがいる。その者達が裁いているのだ。彼らも殺人者ではないか」

### →東京裁判を原爆のことをを使って批判した

この発言は日本語の裁判記録には残されずのちに裁判の記録映画を作る際に初めて翻訳された

## 2.5 彼らがいたから裁判は公正だったのか

### ▶ ジョージ・A・ファーネス弁護士の裁判中の発言

**「この裁判の裁判官は戦勝国ではなく中立国の代表がすべき」**

2.4のブレイクニーの発言にも言えることだが、弁護士たちは公正な裁判だと思っていたいなかった。

### ▶ また、デイヴィッド・スミス弁護士は証人への尋問の際、裁判長がたびたび介入してきたため「**不当な干渉**」と発言し（アメリカの裁判ではよく使われる表現）取り消しを命じられたが取り消さず退廷を命じられた。

### 3、まとめ

アメリカ人弁護士は自らの仕事を全うし被告、弁護士団の力になったと考えられるが、それが裁判の公正さに役立ったとは決して言えない。あくまで東京裁判は不公平なものであると考えられる。